みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ピウスツキの生涯：ピウスツキと日本

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 沢田, 和彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003750

ピウスツキと日本

沢　田　和　彦*

はじめに

1905年（明治38年）秋，ブロニスワフ・ピウスツキは帰国の途次日本に立ち寄った。彼が最初に姿を現すのは10月初旬，所は神戸である。これは，9月5日[1] ポーツマスで日露講和条約が締結された直後の時期にあたる。そして翌1906年8月3日まで約8カ月間の滞日中に，ピウスツキは神戸，東京，横浜，長崎を駆けめぐって多くの人々と交渉を持った。それは大略次の四点に要約できよう。

1. 亡命ロシア人革命家，中国人革命家との接触
2. 彼らの援助者たる二葉亭四迷，横山源之助や日本の社会主義者との交遊
3. 民族学研究，及び日本の民族学者との交わり
4. 石光真清（まきよ）や黒龍会の花田仲之助，平岡浩太郎らとの関わり

以上四点が直接，間接に関連し合っていることは言うまでもない。本稿では紙幅の都合上，また調査の進行上，最初の三点について述べることとする。

1.

アメリカに亡命し，その後ハワイに帰化したロシア人革命家ニコライ・ラッセル，本名スジローフスキイは，日本に送られたロシア俘虜兵士に革命思想を鼓吹する任務をもって1905年5月に来日し，神戸で発行されていたロシア人俘虜向けの週刊露文新聞『日本とロシア』の記者になった。更に新聞宣伝の間接手段だけでは飽きたらず，慰問を口実にして習志野，浜寺，松山，熊本の俘虜収容所を巡回して，ロシア兵と直接話し合った。

ピウスツキは10月初旬に神戸に来て，ラッセルの事務所を手伝うことになった［和田　1973：上 311］。サハリンでまず第一にピウスツキを探すようラッセルに忠告を

* 新潟大学人文学部　本館研究協力者

1) 日付は新暦で統一した。

与えたのは，ジェイムズ・ダグラスである[2)]。このポーランド生れのイギリス人は，日本軍に投降したポーランド兵を国外に送り出すべくポーランド社会党によって日本に送りこまれたものの，後には自分の使命をラッセルにおしつけて姿をくらました人物である。ラッセルはサハリンに政治囚がいることを知っており，いち早くその解放と身柄の引き受けを日本の陸軍省に陳情した。彼らの中に自分の協力者を得たいという気持ちもあり，第一にピウスツキに白羽の矢が立ったということであろう。元「人民の意志」党員トリゴーニによれば，この年の8月17日，政治囚はサハリンを占領した日本軍から自由の身たることを通告され，同時にラッセルの海軍大臣宛の手紙の写しを見せられたという [Тригони　1906: 56]。もっとも，この時点でピウスツキは既に島にはいない。

11月中旬にピウスツキは一旦ヴラヂヴォストークへ戻った。これは，10月30日にニコライ二世の「十月詔書」が公布され，自由獲得への光明が点されたこと，11月15日に日本の各紙が一斉にヴラヂヴォストークの反乱を報じたこと，また同日かの地の上陸解禁の知らせが流れたこと[3)]，と恐らく無関係ではあるまい。彼は11月18日にハバロフスク市住民集会に参加し，「労働ビューロー」設立を提案して，そのために100ルーブリを寄附した [H12: 179]。また同月26日にはヴラヂヴォストークでトリゴーニと会った [Тригони　1906: 52]。

ピウスツキはその後ヴラヂヴォストークからマトヴェーエフと共に再度来日した[4)]。マトヴェーエフは日本（函館露国領事館）で生まれた最初のロシア人と言われ，新聞，雑誌の編集発行人兼詩人として知られる人物である。ピウスツキは12月下旬，遅くとも翌1906年（明治39年）1月初旬には東京へ赴き，ホテルやロシア語関係者の家に仮住まいの後，同月下旬には京橋区尾張町9番地[5)]の函館屋という商店の二階に居を据えた。この商店の主人は，信大蔵（しんたいぞう）という人物。かつて尾張藩江戸詰の武士で，榎本武揚に従って五稜郭の戦いに参加し，銃弾を6発受けたという前歴を持つ。1874年に銀座に来て，榎本の援助のもとに函館の天然氷や牛乳を商い，後にはアイスクリームや洋酒類も置いて，バーの元祖として銀座の名物のひとつとなった [野口　1985]。ヴラヂヴォストーク方面のロシア人と取引があり，亡命外国人や旧幕臣が常にたむろしていたという。

2) Piłsudski, B. Manuscripts. H4, p. 42.　H は北海道大学スラヴ研究センター所蔵，4は分類番号を示す。以下マニュスクリプトからの引用は，本文中のカギ括弧内に H，分類番号，頁数を記す。
3)「東京電報　浦塩上陸解禁公報」『東洋日の出新聞』1905年11月15日。
4)「浦汐より二人の珍客」『北海タイムス』1906年1月10日。
5) 現在の銀座6丁目のコスモ天地堂のある所。

一方ラッセルは一大使命を果した後，1月下旬頃に長崎へ移った。かの地に続々亡命してくるロシア革命党員の救済のためである。ヴラヂヴォストークと一番交渉のあるこの地の下(さが)り松南山手12番地に，ラッセルは居を構えて同志を糾合した。3月中旬から9月まで彼は家庭の事情で一時ハワイへ帰ったが，この間ヴァヂェーツキイとオルジフが中心となって4月27日からこの〈長崎のコンミューン〉でロシア語の新聞『ヴォーリャ』(「自由」)を発行し始めた。この新聞はシベリアの各都市に広がって争って読まれたという。ピウスツキは東京にいて，この新聞の協力者をつとめた。そして7月には長崎へ赴き，一カ月間志賀親朋(ちかとも)方に居を定めて，直接彼らの活動を援助した。本邦最初のプロのロシア語通辞として幕末，明治期の日露交渉に活躍した志賀については，稿を改めて論じたい。

ピウスツキの長崎での具体的な活動は定かでないが，情勢の「好転はありえない」[H9: 18]と同志に書き送っていることからして，既に革命運動に対して少なからず懐疑的になっていたのではないか。ラッセルとの連絡はその後跡絶えていたが，6月頃ピウスツキが彼に手紙を書き，併せて在日中国人革命家たちの手紙を送ってやったのに対し，ラッセルの方は『哲学会報告書』2巻を郵送してきた [H4: 31, 33]。その後も両者の書簡の往復は続き，〈長崎のコンミューン〉の現状を「詳しく知らせてくれたあなたの手紙は，私にとって指針となるでしょう」[H4: 30]とラッセルはピウスツキに感謝の言葉を綴っている。『ヴォーリャ』は5月17日付の11号より長崎を去ったヴァヂェーツキイに代わってオルジフが編集長となった [和田　1973: 下 120] が，その内部には不協和音が響いていた。ラッセルはハワイ滞在中から『ヴォーリャ』に批判的で，「日刊新聞を出し始めたものの，それは国外では意味を持ちません。……この週3回という形式でも，決して成功することはありえないでしょう。」[H4: 32, 33] と手厳しい意見をピウスツキに伝えている。

2.

ピウスツキは在日中国人革命家とも交わりをもった。1906年3月10日の午後，彼は芝区芝橋の大光で宋教仁と会見した。湖南出身の宋は1904年に来日し，雑誌『二十世紀之支那』を発行していたが，翌年8月東京で孫文を総理として中国革命同盟会が結成されると，その幹事として会務を担当した。当時24歳の早稲田大学の学生である。ピウスツキと宋の会見の仲介の労をとったのは，宮崎民蔵。中国革命支援で名高い宮崎兄弟の次男にして，土地問題の先駆者である。宋の当日の日記には次のように記されている。「……また革命の事は一つの方面より手をつけてはならないと [ピウスツ

キは一引用者] いう。政治的革命だけをやっていたのでは，真の自由はかならず獲得できない，社会的革命だけをやっていても，またかならず真の自由は獲得できない。かならず二者を一緒にやって，はじめて自由の権利は得ることができ，目的を達することができると」。ピウスツキは宋に，当時計画中の『ヴォーリャ』のことも話した。彼はこの後同盟会の民報社を訪れ，宋教仁，黄興その他多くの中国人及び宮崎民蔵，宮崎滔天（末弟），その他の日本人にかこまれて記念撮影を行なった。もちろん孫文とも会っている。更に交渉を深めたのであろう。同盟会の機関誌『民報』第4号に『ヴォーリャ』刊行の紹介文が掲載されたが，その材料を伝えたのもピウスツキである [和田　1973: 下 190–191]。

いま一人，呉弱男ともピウスツキは会っている。呉は上海に生まれ，愛国女学校で革命家としての教育を受けた。ほどなくして姉・呉亜男と共に来日し，青山女学院英文科に入学した。同盟会にも入会，当時18歳である。彼女はピウスツキとこの年4月3日に会い，翌日自分と姉の写真と，自著『20世紀自由の鐘』(《The Twentieth Century Liberty Bell》, 1905) を彼に送ってきた [H4: 22]。7月5日の『ヴォーリャ』第32号に「中国女性革命家」と題して呉の編集長宛の手紙が掲載されたが，あるいはこれもピウスツキの仲介によるものか。ピウスツキにはポーランド人として，民族独立の課題をもつこれら中国人に関心をよせるところ大だったのであろう。

3.

1906年初頭，上京後まもなくピウスツキは二葉亭四迷，本名長谷川辰之助のもとを訪れた。文学の世界に踏みこんでからも，対露政策に腐心し続け，ロシア革命派への関心を強めつつあった折りにピウスツキに出会った二葉亭は，彼に物心両面で惜しみなく援助を与え，さまざまな人々に引き合わせた。二葉亭の真意は，「日本の爲に滿洲經營を必要とし，露國の爲には社會主義者一派に援助して，民權の伸ぶるを必要としたものだらう。」[坪内・内田　1909: 上ノ218] という。二人は殆んど毎日往き来し，短時日のうちに極めて親密な間柄となった。二葉亭はピウスツキについて次のように述べている。「▲現に自分の知つて居る露人中に斯様の人物が一人居る。西比利亞で苦役に服し，今は四十才位でもあらうか，未だ家をなさない。而もアイヌ救濟を一生の大責任と心得て，東京まで出て來た。所が世間が餘りに冷淡なので大に憤慨して居たやうだ。▲さらば御當人はと言へば，嚢中屢ば空しと言ふ有様で，衣服などは粗末で，食物などは何をも選ばぬ，生命さへ繼げば，夫れで充分だ，ドウしてもアイヌの如き憐むべき人種を保護しなければならぬと考へて居る。▲局外から見れば，實に馬

鹿げて居るやうだが，其のあどけない眞面目の態度が，吾々の同情を惹く所である」[二葉亭　1907: 205–206][6]。

まもなくピウスツキは二葉亭を見込んで，革命党の資金づくりのために，ラッセルがハワイに持つ100エーカーの邸宅農園の売却に協力してほしいと頼んだ。二葉亭は張り切ってピウスツキと共に『毎日新聞』の社主・島田三郎，大隈重信，巌本善治，そして『自由党史』の編纂者・和田三郎の紹介で，板垣退助を訪ねた。この要人訪問はいずれも不成功に終ったが，しかしそれがラッセルの土地売却のためだったというのは名目上のことで，実は日本政府が亡命ロシア革命家をロシア政府に引き渡すつもりかどうかを打診するためのものだったのである [和田　1973: 下 127–128]。後に島田三郎は次のように述懐している。「其後亡命の露國人某を同伴せられて其の安全を保つべき方法を相談せられたれば愚見を陳べ，且大隈伯其他一二の人々に紹介したり。」[坪内・内田　1909: 下ノ 111] この一事が『ヴォーリャ』の人々の心配の種だった。さて打診の結果はどうだったか。5月7日発行の『ヴォーリャ』第6号にはヴラヂーミル・ゴルヴィツの論文「政治亡命者引き渡し」に付して，次のような編集部の発表が掲載された。「東京その他の日本の地域にいる編集部員が日本の文化界の代表的人物，若干の議員や政治家と行なった多くの話し合いから，日本が政治犯の引き渡しを許さないばかりか，ロシア政府の意を汲んで政治犯を圧迫することもしないという点について，まったく疑いはないことが明らかとなった。」[和田　1973: 下 117] 日本の支配層のロシアに対する警戒心は基本的にはなお強烈で，露国革命党は依然としてひそかな同盟者たる性格を失なっていなかった。他方社会主義に対しては，西園寺内閣は一定の柔軟路線をとり，この年2月に日本社会党の結党を認めている。このような政策のもとで，『ヴォーリャ』グループは存在していたのである。

まもなく二葉亭は革命派の運動に冷淡になっていった。同年（月日不明），北京警務学堂時代の同僚・阿部精二に宛てて，彼は次のように憤まんをぶちまけている。「……渠等は皆空論を以て事を成さんと欲する徒にて口舌以上の活動をせんといふ意なし，こんな事で何が出來るものかと愛想をつかしたる次第に候，……」[二葉亭 1906: 354] だがピウスツキとの交際は変わりなく続いた。二葉亭は彼の「年を取った小児」のような人柄を愛したのである。帰国が決まった時，「イの一番に尋ねたのは，長谷川君の家で，二十幾貫の大男が突然飛びついて，潸々と涙を出して，君に喜悦を分つたといふ」[坪内・内田　1909: 上ノ 219]。

6)「文壇を警醒す」(1908年) にもピウスツキの言及がある。『二葉亭四迷全集』4　東京：筑摩書房，1985年，p. 242。

ピウスツキに文学の素養があったことも，両者の交遊を途切れさせなかった一因であろう。二人は日本・ポーランド協会を設立し，両国の交流をすすめるために，「先づ一番容易で，一番故障の少ない文学」の翻訳紹介を取り上げることにした。そして編集者・西本波太の出版所が協会の事務所となった。ピウスツキの帰国後も，両者の関係は跡絶えなかった。ピウスツキはガリツィア（オーストリア領ポーランド）の首都クラクフでポーランドの代表的作家，批評家に自作の推薦やその露・独・仏・英訳の寄贈を求め，それらを二葉亭に送ってきた。東京に日ポ協会付属図書館を設けるためである。そしてそれらの日本への紹介を繰り返し依頼した。そのうち二葉亭によって訳出されたのは，革命家ピョートル・セルゲーヴィチ・ポリワーノフの短編小説『志士の末期』，アンジェイ・ネモエフスキの散文詩『愛』，そして自然主義作家ボレスワフ・プルスの『椋のミハイロ』である。『志士の末期』は，若き日の純粋な正義感に燃えて革命運動に身を投じた主人公が，捕えられてペテルブルグの監獄につながれ獄死する心境を，暗い筆致で描いたもの。『愛』も革命家の心境をシンボリックに歌ったものである。『椋のミハイロ』は二葉亭の翻訳中，乞食や無宿人のような社会の最下層の人間を扱った作品群に属する。後の二作はピウスツキ夫人・マリア送付のロシア語訳からの重訳である。以上三篇の翻訳は福田英子の雑誌『世界婦人』に発表された[7]。そして同誌はあたかも日ポ協会の機関誌のような役割を果すようになった。後に福田は，「並々の雑誌社書肆等が如何に請ふとも仲々に筆とり給はぬ氏が斯く引續きて筆とり賜りしは全く孱弱なる吾が苦境を憐れみ給ひしが故なりき。」[福田 1909: 1] と気配りを見せているが，内実はむしろその逆と言うべきだろう。即ち，『志士の末期』は後半が抄訳，『愛』は未定稿，『椋のミハイロ』は未完であって，ここには当時の二葉亭の創作と翻訳における苦渋の他に，ある種の我がままさを認めることもでき，『世界婦人』に対する関わり方に一種の気軽さのようなものがあったことは否めない [佐藤　1963: 79–80]。

一方二葉亭も1907年，ピウスツキに森鷗外の『舞姫』と木下尚江の長編小説『良人の自白』のそれぞれ英語版[8]を送付したが，前者は日本文学の特質が表れていないという理由で取り上げられず，後者のみがポーランド語に翻訳された。二葉亭と木下の出会いは1906年春のこと。二葉亭がピウスツキを伴なって，木下の勤務する毎日新聞社を訪問したのである。「長谷川君の背後に一人の外人が立つて居る。長谷川君は顧

7)『志士の末期』は4号から5，6，9，11，15号（1907年2月15日—8月15日）と6回連載，『愛』は23号（1908年3月5日），『椋のミハイロ』は24号（同年4月5日）に掲載。

8)《My Lady of the Dance》Tr. by F. W. Eastlake. Tokyo, Saiunkaku, 1906, 47 p.《The Confession of a Husband》Tr. by Arthur Lloyd. Tokyo, Yurakusha, 1905–1906. 2v.

みて，其の人を紹介した。波蘭の革命黨員で，シベリヤの流罪地から逃れて居たのだ。始めて見た時には一寸老人かと思つたが，話して居る中に壯年者であることが知れた。」[木下　1934: 244] その後も二葉亭と木下はいつも函館屋の二階で会ったという。

宿願かなって二葉亭が，ナロードニキの色彩の濃い当時のロシアの有力誌『ロシアの富』に寄稿することになるのも，ピウスツキ夫妻の斡旋による。同時にピウスツキによるポーランド語訳をポーランドの『スフィンクス』誌に寄稿することも決まった[安井　1966: 24]。我が国文壇始まって以来のことである。もっとも，当時経済的に苦境にあったピウスツキが，この仕事によって収入を得ようとしたことも事実で，二葉亭に「正直いって私はこの仕事で幾らか稼ぎたい。……翻訳料として原稿料の一部を受け取りますが，よろしいか。」(1907年10月24日—11月6日付) [安井　1971: 43] と断わっている。これをうけて二葉亭は『ロシアの富』の編集者アーンネンスキイに次のような手紙を書いた。「……もし私の原稿がそれに価するのであれば，原稿料は私にでなくピウスツキにお送りいただくようにお願い致します。二人で分け合う積りでおりますので。」(同年12月18日付) [安井　1975: 91] 二葉亭の人柄を偲ばせる文面である。これに対するアーンネンスキイの返信（1908年1月21日付）は，しかしながら，ピウスツキが読めば落胆するに違いないものだった。「……特に申しあげたいのは，あなたのことばの方がピウスツキのロシア語よりもはるかに正しいことです。…第三者の手を経ないで直接こちらへ送って下さるほうが，あなたの文章に二，三の必要な修正を加えるのも簡単にすみます」[安井　1973: 79]。だがピウスツキとアーンネンスキイの督促にもかかわらず，二葉亭は結局いずれの雑誌にも原稿を送らなかったようだ [安井　1966: 25]。1908年に二葉亭は『朝日新聞』特派員としてペテルブルグへ赴き，そこでマリア夫人に会うが，ピウスツキ自身との再会はならなかった。

4.

二葉亭がピウスツキを引き合わせた人物のひとりに横山源之助がいる。二葉亭の影響下に放浪生活に入った横山は，同じ関心を持つ松原岩五郎や嵯峨の屋お室と交わって，社会問題に目を向けるようになった。そして1899年に二冊の名著，『日本の下層社会』と『内地雑居後之日本』を世に送り出した。

さて1906年早春のある雨の日の夕方，二葉亭とピウスツキが湯島天神の横山の下宿にやって来た。三人はお成道の西洋料理店で夕食を済ませた後，横山の下宿に引き返して語らい始めた。ピウスツキは横山に，「日本(にほん)の學者(がくしや)は何故(なぜ)日本(にほん)の舊民族(きうみんぞく)である此(こ)

のアイヌを閑却してゐるのであらう」と言った。「學者的態度を以て研究するばかりでなく，正義博愛の觀念強く，社會的同情を以てアイヌの現狀を見てゐたのが日本の學者と異る所」[坪内・内田　1909: 上ノ 216] だった，と横山は書き残している。二葉亭がピウスツキを紹介したのは，ピウスツキのアイヌ研究と彼の下層社会研究に相通ずるものがあると考えたためだろう。次のような横山の証言も，彼がピウスツキと身近に接した人間たることを示している。「で，ピ氏自身は革命運動に怖気を立て，革命は好物だが，運動が嫌ひだといつてゐたが，永年西比利亞に漂ひ，革命者に知己が多かつた所から此の無邪氣の人も，日本に在留してゐた露國革命黨の捲き添となり，日本に在留して長崎と東京との連絡と爲つて，革命黨の爲に民間に運動してゐた」[坪内・内田　1909: 上ノ 217]。横山が被差別部落民のことを話すと，ピウスツキは強い関心を示し，すぐに自分で訪ねていった。被圧迫民族のポーランド人である彼が，この日本でアイヌ人と被差別部落民に関心をよせたことは，記憶されてよいだろう。前記ラッセルの土地売却の件で二葉亭とピウスツキを島田三郎に紹介したのは，以前『毎日新聞』に勤めていた横山である。但し，二葉亭は彼に要人訪問の真の目的を明かしてはいない [和田　1973: 下 128]。

更に横山はピウスツキからの聞き書きで，二つの文章を著わした。一つは「露国革命婦人」と題するもので，松原岩五郎編集の雑誌『女学世界』の1906年4月号に発表された[9]。女傑ナロードニキ・リュドミーラ・ヴォルケンシチェインの一代記である。ヴォルケンシチェインはハリコフ県知事クロポトキンの暗殺に加わった廉で逮捕され，シュリッセリブルグ要塞監獄，次いでサハリン島へ流刑となった。1902年に刑期を終えてヴラヂヴォストークに移住，そして1906年1月23日，かの地に起こった争乱でヴォルケンシチェインは殺戮されたのである。ピウスツキは彼女とサハリンで同囚だったので，その死を深く感じて横山に話したのであろう。この年4月5日付の二葉亭宛書簡で，ピウスツキが次のように書いたのは，この論文のことである。「すでに博文館の婦人雑誌に横山さんの文章が掲載されています。彼がステロ版をくれるのを待っています。中国の学生たちに頼まれましたので―」[安井　1970: 82]。

いま一つの文章は「来遊中の布哇砂糖王（露国革命党の金主）」と題するラッセルの一代記で，雑誌『商業界』の同年4，5月号に分載された[10]。横山は俘虜工作の終りまでのラッセルの経歴をかなり正確に物語っているが，その前書きと後書きから，

9) 1906年3月15日執筆。後の単行本『凡人非凡人』（新潮社・1911年）では「砲弾に殞れたる婦人」と改題，加筆された。
10) 1906年3月18日執筆。5月号の表題は「露国革命党の金主」のみ。『凡人非凡人』所収時に「露国の亡命客」と改題，加筆された。

ピウスツキがラッセル自身から聞いた談話を横山に伝えたこと，その際二葉亭が両者の通訳をつとめたことが分かる。本論文は当時の日本の読者に露国革命派の一タイプを提示してもいる。

5.

ピウスツキは日本の社会主義者とも接触をもった。1906年2月6日の夜，神田三崎町吉田屋で片山潜の帰国歓迎会が開かれた時，ピウスツキはそれに出席し，加島汀月の通訳でロシア語で演説した。前年10月に平民社が解散し，キリスト教派が『新紀元』，幸徳秋水，堺利彦，西川光二郎，山口孤剣らが『光』と分裂して，それぞれ新聞を出すことになったが，その『光』の前日発行の号にこの歓迎会の予告が載っている。それには，「……尚ほ同日波蘭人にて國事犯の爲十二年間樺太に流罪となりたる同志も出席すべし」とあって，彼の出席が一種の〈出し物〉として会に彩りを添えるものだったことが分かる。この席上幸徳秋水夫人・千代子は，絹手巾に老梅を描いて彼に贈った[11]。ピウスツキは帰ってきて，社会主義者の集まりといっても労働者がいないと不思議がったのに対し，二葉亭は「日本の社會主義は學生の社會主義だ」と説明した」[坪内・内田　1909: 上ノ 217] という。ピウスツキは堺利彦，加藤時次郎とも交わった。堺は，ピウスツキが異人種結婚を大いに推奨したと述べている [堺　1906: 32]。加藤は横浜の平民病院院長で，幸徳秋水の主治医をつとめ，『光』の経済的スポンサーでもあった。

ピウスツキはまた二葉亭の紹介で石川三四郎，阿部磯雄，木下尚江等，『新紀元』社の面々とも交際し，2月25日には神田小川町の牛屋で開かれた晩さん会に出席して，一同と写真撮影を行なった[12]。福田英子の『世界婦人』が日ポ協会の機関誌のごとき役割を果すようになったことは既に述べたが，そもそも同月二葉亭を彼女に引き合わせたのはピウスツキである。

当時，婦人の苦しんでいる様々な問題の根本的な解決は社会主義以外にありえないことを訴え，婦人層を結集しようとする運動が展開されていた。『世界婦人』のスローガンが「婦人解放」であり，特に婦人の政治上の自由の獲得と恋愛の自由（家族制度からの解放）に力点を置いたのも，この流れに沿うものである。ピウスツキはこのような若い婦人運動家とも交際を持った。例えば今井歌子と遠藤清。今井は月刊誌『二十世紀の婦人』の事務を引き受け，やがて社会主義者と交渉を持つようになって，

11)「同志之運動　片山潜氏歓迎会」『光』I(7): 7, 1906年2月20日。
12)「新紀元集合」『新紀元』6: 23, 1906年4月10日。

婦人に政治上独立の人格を認めない治安警察法第五条改正の請願運動を，福田英子と共に展開した女性である。この運動を後に支えたのが遠藤清。後の『青鞜』同人で，1909年に作家・岩野泡鳴と結婚したが，夫と青鞜社員・蒲原英枝との関係を知って離婚。後年，洋画家・遠藤辰之助と再婚した。ピウスツキは日本の婦人に興味を持ち，従ってこのような交際は，彼の「日本婦人の研究」に資するところ大であったろう。彼は帰国後市民大学で日本婦人について公開講演を行なった [安井　1971: 29]。

6.

ピウスツキの第二の，そしてアイヌ関係では最初の学術論文が，日本語で日本の雑誌に発表されたことは特筆に値する。即ち，月刊誌『世界』の1906年7，8月号に，「樺太アイヌの状態」という表題で彼自身の撮影による樺太アイヌの写真5葉とともに掲載されたのである。論文の訳者は上田将。ニコライ神学校でロシア語を学び，1881年以降数多くの正教会の教書その他を訳出した人物である。当時は『東京日日新聞』の記者にして，『ヴォーリャ』創刊号から第46号（8月7日）まで，東京での予約購読と広告の受付けをしていた。上田は二葉亭や神学校関係者，亡命ロシア人，中国人革命家等と広い交際範囲を持ち，この年11月の，孫文・ゲルシューニ会談の通訳をつとめたのも彼である [和田　1973: 下 156–157]。「樺太アイヌの状態」が発表されたのは，ちょうどピウスツキの離日前後の時期にあたるが，彼はそれを目にしていなかったらしく，その結果と反響を二葉亭に問い合わせている（11月21日付書簡）。「……「世界」誌で，アイヌ人の状態を書いた私の小論文の翻訳を読まれましたか。それは簡約化された草稿から訳されたもので，しかもそれを上田がどう訳したか私は存じません。それに対して批評はありましたか。どんなでしたか」[安井　1970: 91]。

ピウスツキは日本の民族学者やアイヌ研究家とも積極的に交際を求めた。彼が初めて横山源之助のもとを訪れたのは，東京帝国大学理学部人類学教室で坪井正五郎博士の研究談を傍聴した帰りのことである [坪内・内田　1909: 上ノ 215]。ピウスツキの論文「樺太島に於ける先住民」には，坪井博士の説が引用されている。また1908年3月9日付の二葉亭宛書簡では，坪井教授らがサハリンを旅行したとの便りを受けとった，きっと写真を撮っただろうからそのコピーを入手してほしい，と書き送っている [安井　1971: 58]。ちなみにこの旅行中，坪井一行は東海岸のアイヌの酋長バフンケイ（その姪チュフサンマとピウスツキはかつて同棲し，2児をもうけた）の家に一夜の宿を求めた [桑原　1908: 332–333]。

坪井博士の教え子で，当時東京帝国大学理科大学講師だった鳥居龍蔵とも，ピウスツ

キは上京早々に交わりを結んだ。鳥居は彼を東京西ケ原貝塚に案内し，また1911年には前記「樺太島に於ける先住民」のドイツ語版（《Die Urbewohner von Sachalin》）から訳出して，『世界』，『人類学雑誌』，『北斗』の三誌にほぼ同時に発表した。この論文には鳥居の『千島アイヌ』（吉川弘文館・1903年）からの引用が見られる。ピウスツキは鳥居の妻・君子とも親交を結んだ。この年3月，蒙古喀喇沁（カラチン）王府女学堂の教師に招かれた君子が日本を発つ時，ピウスツキは見送って，彼女に写真を手渡した [H9: 74–75]。君子は堪能な蒙古語で，夫の蒙古，満州の調査には欠かせぬ助手をつとめた。

その他ピウスツキは，「北海道土人教育会主任　米国文学博士」小谷部（おやべ）全一郎から，北海道・虻田の彼の自宅に滞在してアイヌ研究をしないかという誘いをうけている [H9: 158–159]。また関場不二彦，村尾元長，神保小虎とも，独文，英文，邦文等で書簡のやりとりをした。

7.

かくして日本で実に多くの人々と多様な関係を結んだ後，1906年7月30日にピウスツキは他の同志3名と共に海路長崎を発って[13]，神戸，横浜に寄港の後，一路シアトルへと向かった。船は，日本郵船株式会社長崎支店の取扱いによる大北汽船株式会社 (Great Northern Steamship Co.) のダコタ号。香港発，上海経由長崎という航路である [H3: 10, H4: 180]。

8月2日横浜に着き，翌3日に出港。恐らく二葉亭や上田と最後の別れを惜しんだことであろう。横浜出港後も，日本との縁は依然として切れなかった。実はダコタ号に日本人密航者が乗り込んでいたのである。この広島県人は横浜出帆後2日にして発見され，寒さに震えていた折りにピウスツキに毛氈を恵与されたという [H3: 14]。ピウスツキの人柄を物語るエピソードと言えよう。この後アメリカ，フランス経由で，10月クラクフに帰着した。

おわりに

8カ月間の日本滞在がピウスツキの全生涯においていかなる意味をもつか，一言で語ることは至難の業である。しかしながら，それが極めて異例の，長い滞在期間であることは間違いない。元来，シベリアやサハリンの流刑囚にとって日本とは，流刑地からの脱出路の途上にあるエキゾチックな島国にすぎなかった。しかるにピウスツキ

13)「露国革命党員の奔走」『東洋日の出新聞』1906年7月31日。

が結果的に8カ月も滞在したという事実は，彼の日本での居心地の良さを物語るものだろう。恐らく彼は少なからざる物質的，精神的援助を受けていたのであり，その点で二葉亭と上田が果した役割は大であったろう。それを象徴的に示すような証言を最後に引用して，本稿の締めくくりとしたい。

話は飛んで1914年，第一次世界大戦必至の気配を察して，ピウスツキはクラクフからウィーンへと逃れた。ロシア軍のガリツィア進駐を恐れたものと思われるが，多分その途次であろう，同年6月末に彼はベルギーのブリュッセルで石川三四郎と再会した。石川はピウスツキの離日後社会主義活動ゆえに数度にわたって投獄され，1913年にフランス船で日本を脱出して，約8年にわたるヨーロッパ放浪の旅に出た。ブリュッセルに半年暮し，ロンドン郊外に半年暮し，再びブリュッセルに戻って，フランスの地理学者にしてアナーキストのルクリュ家に落ち着いたのは，翌年晩春のことだった。このルクリュ家を，糊口の資を得るためであろう，ピウスツキが訪ねてきたのである。石川によれば，当時ピウスツキは「万国原始社会研究院」なるものを設立し，自ら院長とか副院長とか称していたという。「……「私はヨーロッパに帰つて来てアイヌ学者として世に立つことになつた。もう革命家はやめた。よい優しい婦人と結婚したのだが，最近その家内に死なれた。」ここまで話して彼は如何にも淋しさうになり，眼には一ぱい涙を湛えた。そして「再婚してもよいが，私の仕事に理解のある，金持の婦人と結婚したい」と如何にも真じめに，淋しさうに語るのであつた。彼の現在が余り幸福でないことは直ぐに読めた。日本にゐた時は，眼も頬も若さと柔和さとに輝やいてゐたのに，今はその紅潮を湛へた頬の艶も消え失せて，瞳さへ曇りがちに見へる。」[石川　1939: 282] と石川は回想している。ピウスツキがパリで自ら命を絶つのは，この4年後のことである。

本稿執筆に際し，安井亮平氏の一連のご論稿と和田春樹氏のご労作に負うところ特に大であった。また NHK の山岸嵩氏からご教示を賜わった。

文　　献

福田　英子
1909 「二葉亭四迷氏逝く」『世界婦人』37: 1。
二葉亭四迷
1906 「阿部精二宛書簡」『二葉亭四迷全集』7　東京：岩波書店，1965年，pp. 353–354。
1907 「露国文学談片」『二葉亭四迷全集』4　東京：筑摩書房，1985年，pp. 203–206。
石川三四郎
1939 「ピルスヅスキイの想ひ出」『石川三四郎著作集』6　東京：青土社，1978年，pp. 279–284。

木下　尚江
1934 「長谷川二葉亭君」『神・人間・自由』東京：中央公論社，pp. 236–267。
桑原　雷晏
1908 「魚山書屋雑記」『東京人類学会雑誌』267: 332–335。
野口　孝一
1985 「ピウスツキと銀座の函館屋」『北海道新聞』夕刊　12月12日。
Piłsudski, B.
Manuscripts.
堺　利彦
1906 「波蘭の珍客」『家庭雑誌』4(3): 31–32。
佐藤　勝
1963 「二葉亭と「新紀元」「世界婦人」——福田英子との交渉をめぐって——」『国文学解釈と鑑賞』28(5): 76–81。
Тригони, М.
1906 После Шлиссельбурга. *Былое* 9: 45–62, СПб.
坪内逍遙，内田魯庵 編
1909 『二葉亭四迷　各方面より見たる長谷川辰之助君及其追懐』東京：易風社。
和田　春樹
1973 『ニコライ・ラッセル　国境を越えるナロードニキ』上・下　東京：中央公論社。
安井　亮平
1966 「二葉亭四迷のロシヤ人・ポーランド人との交渉」『文学』34(8): 22–30。
1970, 1971 「館蔵二葉亭四迷宛ピウスツキ書簡〔翻刻・訳〕」(一)・(二)『早稲田大学図書館紀要』10: 78–100, 11: 26–59。
1973 「館蔵二葉亭四迷宛諸家欧文書簡〔翻刻・訳〕」『早稲田大学図書館紀要』14: 67–88。
1975 「二葉亭の露文書簡その他」『文学』43(9): 86–94。